

金持神社

魅力ある観光資源で、まちづくり 大みそかは夜を徹して盛り上げる

今年も残りあとわずか。全国で1カ所しかない縁起の良い名前の神社「金持神社」には、金運・開運を求めて遠方から参拝者が訪れます。初詣で多くの参拝者が予想される金持神社。それを盛り上げる町観光協会の取り組みを追いました。



毎年、元旦から多くの参拝者でにぎわう金持神社



絵馬には、参拝者の金運・開運の願いが込められている

歴史ある神社

金持神社の由来…金持郷は、昔、黄金より勝ると言われた「玉鋼」の産地で、原料の砂鉄が採れる谷を所有し、「金具」というように鉄のことを「かね」と読んでいた事から、金の採れる谷を多く持つ郷「金持」と呼ばれるようになったと伝えられています。

この縁起の良い名前から、金運・開運のパワースポットとして全国から参拝に訪れる人が後を絶ちません。参拝者が奉納した絵馬には、金運・開運祈願のほか、実際に宝くじの当選や、商売がうまくいったなどご利益のお礼も書かれています。

知名度は全国レベル

全国から注目される金持神社。家族連れや観光バスなど平日・休日を問わず年間20万人の参拝者が金持を訪れます。また、最近では全国の雑誌が金運パワースポットとして大きく取り上げて取材に訪れています。雑誌のほかにも、遊戯メーカや映画のヒット祈願など訪れる会社も多く、反響の高さがうかがえます。

ご利益を多くの人に

日野町観光協会事務局を担当する加藤杏奈さん（役場企画政策課）は、「車や観光バスで来られる人が多く、毎日のように金持神社までの道のりや所要時間の問い合わせがあります。多くの人が来てもらえることはうれし」と笑顔。

福娘（札所スタッフ）の宮崎佳代さん（根雨）は、「お札参りの人とお会いでき、どんな良いことがあったのか話を聞けるのもうれしです。金持神社に参拝し始めてからお金のことで大きな変化はなくても、今の状況が悪くならない人が多いので、ぜひ、地元の方にもたくさん来てほしいです」と札所（売店）で参拝者を笑顔で迎えます。大みそかは夜を徹して参拝者を迎える観光協会。参道には石灯籠の設置も予定しています。



金持神社札所の福娘の皆さん（前列左から宮崎佳代さん、亀崎理映さん、後列左から松本麻美さん、砂流加奈代さん）は年中無休で対応する



縁起物の黄色いハンカチ宝くじを包んでみては

* 年末年始のご案内 *

じょうやさい
●常夜祭 12/31 (金) ~ 1/1 (土)

- ▶夕方から翌朝にかけて、石灯籠が参道を照らします。
- ▶ひと晩中、札所を開所し初詣で参拝者を迎えます。

【問合せ】

- ▶金持神社 札所（売店） 開所時間：午前10時～午後4時
〒689-4512 鳥取県日野郡日野町金持 1490
電話番号 0859-72-0481 (7ヶツリ兼)
- ホームページ <http://www.kanemochi-jinja.net/>
- メールアドレス info@kanemochi-jinja.net
- ▶日野町観光協会（役場企画政策課内）
〒689-4503 鳥取県日野郡日野町根雨 101
電話番号 0859-72-0332
7ヶツリ 0859-72-1484

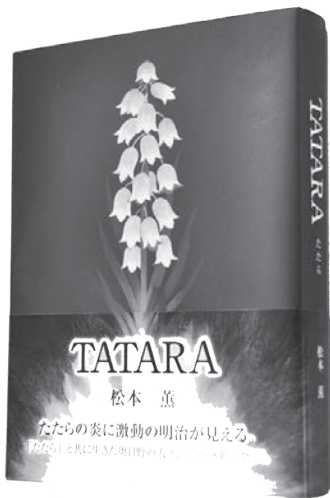


奥日野の歴史をひもとく一冊

小説『TATARA』出版記念フォーラム

11月23日、町文化センターで、小説「TATARA」出版記念フォーラム(伯耆国たたら顕彰会主催)が開かれました。

著者松本薫さんの講談調のあらずし解説や、日野町長、日南町長をはじめ、郷土を愛する人たちが意見交換をして小説の出版を盛り上げました。



奥日野のたたら製鉄の歴史が一冊に

たたら製鉄の盛んな地域で100年の昔から行われており、鉄の産出量は全国の80%を占めていたといわれています。この歴史は後世に伝えるべきもので、奥日野を元気にしたい。情報発信していくため小説にすることを考えました。小説の世界を楽しんでほしい」と話します。

地域を元気にしたい

出版記念フォーラムは3部構成で、1部では著者松本薫さんが講談調であらずしを解説。身振り手振りを交え、テンポよく話す松本さんに、会場は笑いも起こり楽しい時間になりました。

また2部では、長年、近藤家を中心に奥日野のたたらを研究している影山猛さんが時代背景を基に、近藤家について詳しく解説。近藤家で働いている人たちの仕事や「近藤家で働いていると嫁のもらい手が良かった」など、文献で調べたことを話しました。

3部のパネルディスカッションでは、もし映画化するならどのような俳優が良いかなど、たたらを活用した振興策が意見交換され、活発なやりとりで会場からも地域が元気になる振興策への期待が膨らみました。



参加者は、たたら偉大な歴史に圧倒された

歴史に誇りを

著者松本薫さんと伯耆国たたら顕彰会との出会いは平成21年の春。

「たたら顕彰会から、たたらを知ってもらうために奥日野のたたら製鉄を舞台とした小説を書いてもらえないかと依頼がありました。自分自身、以前からたたらに興味があり、3年間、奥出雲や安来の博物館を訪ねました。小説を書いてみたいと思っていたところ、話がきくことになったきっかけを話しました。

「たたら製鉄に関する取材で、近藤家を見学させてもらった。根雨でたたら製鉄について覚えていることを聞いて回りました。また、たたら跡も見て回りました」と取材活動の思い出も。

最後に町民へのメッセージを尋ねると「何度か根雨に来てみて、静かだけど生活の息づかいが感じられる良い町でした。100年前までたたら製鉄が行

われていて、今とは違った風景が広がっていたことが想像できます。日野のたたらは日本の近代化を支えていた歴史に誇りを持ってほしいです」と笑顔で話してくださいました。

松本さんの小説は今回が3作目。1作目の『梨の花は春の雪』は映画にもなっています。

たたらで地域を元気にしたい
パネルディスカッションの様子



著者の松本薫さん(米子市在住)
講談調の解説もお手の物

歴史を後世に

今回、出版記念フォーラムを開いた伯耆国たたら顕彰会の佐々木幸人会長は「奥日野はた

小説「TATARA」は、明治に栄えた根雨の近藤家がモデル。奥日野のたたら製鉄を背景に、主人公の少女が人として、女性として成長する姿が描かれています。

歴史は郷土の宝

少女と少女を取り巻く人々の懸命な生き方や当時の暮らしぶり、これまで知られることなかった「奥日野のたたら製鉄」の歴史についても鮮明に知ることができ魅力いっぱいの内容になっています。

歴史を後世に

今回、出版記念フォーラムを開いた伯耆国たたら顕彰会の佐々木幸人会長は「奥日野はた